

平成29年度アドバイザー派遣事業実施レポート

西部地区授業づくり研究会

- 1 期 日 平成29年6月29日（木）
- 2 場 所 伯耆町立八郷小学校
- 3 研修内容

（1）研修テーマ

個に応じた確かな学力の定着と人間関係力の育成

～『教えて考えさせる授業』を通して確かな学力の定着を図る～

本研究会では、各教科において『教えて考えさせる授業』のスタイルを活用し工夫することにより、児童は見通しをもって意欲的に学習に取り組むことができ、確かな学力の定着が図れると考える。また、一人一人の良さを認め合い、お互いが尊重され、何でも言い合える人間関係を作ることができれば、安心して自分の思いを語り、意欲的に学習に取り組む児童が育つと考え、本テーマを設定した。

（2）指導助言者

東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース

教授 市川 伸一 先生

学力の定着を図るには、習得すべき内容を明確にし、学習の中で繰り返し使いこなしていく場面を設けることが不可欠である。『教えて考えさせる授業』は、習得型の授業スタイルであり、理論面の指導とともに実際の授業につながる演習指導を行っていただける東京大学の市川伸一先生にご指導を仰ぎたいと考えた。

（3）『教えて考えさせる授業』の授業公開

※別紙指導案参照【3年（算数）】

（4）授業研究会

○ 三面騷儀法によるグループ協議

- ・「教える」がコンパクトで、短時間に収まっていた。
- ・前時の学習内容を振り返るための掲示があり、比較しながら説明していた。
- ・予習の習慣づけがなされている。
- ・筆算のアルゴリズムの説明に終わらないようなめあての工夫が必要。
- ・「理解確認」の流れが定着しており、指示が無くても問題を解くことができていた。
- ・相手意識を持ちながら説明をし合うことができていた。
- ・ノート指導で、ものさしを使う習慣をつけさせたい。
- ・「理解深化」の問題はよく考えられた問題で、なぜそうなるのか計算の仕方を話し合える問題になっていた。
- ・共同的学びが自然にできている。
- ・いつも教員がヒントを出すのではなく、理解した児童が教えるのもよい。

- ・「難しかったのでもう少しやりたい」という自己評価があり、苦手な子にも意欲を持って取り組ませることができる授業であった。

○ 指導助言

- ・「教師からの説明」の場面では、児童全員が理解する必要はない(生わかりでよい)ので、本筋をぶらさず教師があっさりと話すとよい。その際、児童の声を拾いながら押さえは教師がするよう意識する。本時では、児童の声と教師の押さえがバランスよくできていた。
- ・「理解確認」では、答えが出て終わりではなく、その答えを説明することが大切である。単元の学習内容だけでなく、相手意識を持った説明の仕方なども身につけるチャンスになるので、大切に扱いたい。児童は自然と机を寄せ、ノートを見せ合い、指で指しながら説明しており、意識がしっかり定着していた。本時の学習を理解しているか確認する場なので、たくさん問題を解く必要はなく、本時のように「これができるば」という問題をピックアップして取り組ませるとよい。挙手をしない児童にも発言する場を設定する必要がある。うまく説明できない児童には手助けをしてもよいので、意図的指名をうまく使いながら表現力をつけさせたい。
- ・「理解深化」では、個人思考に入ってからすぐに教師がヒントを与える場をつくってしまったので、もう少し自分で考える時間を設けるとよい。問題の代案として、筆算は下の位から解くようになっているが、上の位からでは解くことができないのか、なぜ下の位から解くようになっているのかを実際に筆算しながら話し合おうと、さらに難易度も上がり面白いのではないかと。

4 研修の成果

- ・全学級が授業を公開し市川先生に指導をしていただくことで、全員が一丸となって研究会に臨むことができた。
- ・協同的な学び合いについて、児童が学びやすい環境をつくっていくことも大切であると確認できた。机の並べ方一つにも意味があることを再確認できた。
- ・「困難度査定」では、本時の学習内容における困難度査定を記述することで統一を図った。この授業のどこで児童が躓くのか想起し、支援方法や手順を具体的に考えしっかりと準備することが大切であると共通理解した。